

追手門学院大学
心理学論集第28号抜刷
2020年3月31日発行

原 著

青年期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響の検討

山 上 翔 平
(追手門学院大学)

Effects of Parent-Child Relationship in adolescents
on Subjective Adjustment to University

Shohei Yamagami
(*Otemon Gakuin University*)

原 著

青年期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響の検討

山 上 翔 平

(追手門学院大学)

Effects of Parent-Child Relationship in adolescents on Subjective Adjustment to University

Shohei Yamagami

(Otemon Gakuin University)

本研究では、親子関係が大学適応感に及ぼす影響について、父親と母親から受ける影響の差異と大学生の性別に着目したうえで、大学生の認知する高校生の時期の両親との信頼関係と心理的分離が現在の大学適応感に影響を及ぼすという仮説モデルについての検討を行った。調査対象者は大学生301名（男性151名、女性150名）であった。多母集団同時分析の結果、男女ともに父親との信頼関係は大学適応感を高めること、および心理的分離を阻害することが示された。また、女性については母親との信頼関係および心理的分離が大学適応感を高めることが示された。

This study was conducted to reveal the effects of participants' parent-child relationship (trust and psychological independence) during their high school years on subjective adjustment to university, considering both participants' and their parents' gender. Participants were 301 undergraduates and graduate students (men151 and women150). The results of a multiple-group structural equation modeling showed that trust with their father increased subjective adjustment to university and inhibited psychological independence with their father in both men and women. In addition, trust and psychological independence with their mother increased subjective adjustment to university only in women.

key words : parent-child relationship, trust, psychological independence, university adjustment

問 題

青年期は、児童期と成人期の間に位置する時期であり、子どもから大人への移行期と位置付けることができる。このような時期には進学や就職などのライフイベントを通じて、親から情緒的に自立して成人に達するために、社会へ適応する準備をしなければならない（高富・桂田, 2012）。しかし、大学の大衆化に伴う青年期の延長（大石・松永, 2008）やモラトリウム傾向（高坂, 2016）が示すように心理的

に自立できない青年が増加している。そのような現代においてポスト青年期（宮本, 2004）や成人生成期（merging adulthood）（Arnett, 2000）という言葉の誕生が示すように、青年期が長期化している。また、青年期の親子関係にも変化がみられており、パラサイトシングル（山田, 1999）や一卵性母娘（柏木, 2003）というように親への過度な依存や親子の相互依存の在り方が指摘されている（平石, 2010）。

自立の規定要因は主に対人関係が挙げられ、親子関係は特に重要である（Mattanah, Hancock, & Brand, 2004; 水本・山根, 2011）。これまで自立については

国内外で多く検討されてきた。かつての自立研究では、autonomyやindependenceといった親からの独立や分離を強調することに着目されてきたが（Hoffman, 1984）、現代においては親を含めた他者との関連性が重要視されるように変化してきている（水本・山根, 2011; 山田, 2011）。そのような潮流を組んで水本・山根（2011）は、青年期における自立に際して親子の信頼関係の重要性を指摘し、適応的な自立を、「親との信頼関係を基盤として親との一体感から分離して親とは異なる自己を築くこと」と定義している。他にも、Mattanah et al.（2004）は両親との安定した愛着は両親からの分離—個体化を促し、その結果、適応を高めることを報告している。ここから、本研究では青年期の自立について、親との信頼関係が心理的分離を高めるという仮定に基づき分析を行うこととした。

青年期における心理的自立の過程に関する研究の一つに心理的離乳（psychological weaning）という概念が挙げられる。心理的離乳とは、青年の心に生じる家族の監督から離れ、一人の独立した人間になろうとする衝動と定義されているが（平石, 2015）、青年期にはそのような青年の心の変化とともに親子関係にも変化がみられる。落合・佐藤（1996）は、心理的離乳という観点から親子関係の変化におけるプロセスを整理している。具体的には、前期青年期である中学生の時期は、子を手の届く範囲において、子を抱え込み養育関係である「親が子どもを抱え込む親との関係」が多くみられ、高校生の時期を境に徐々に変化し、後期青年期である大学生の時期になると、親から離れたわけではなく、子は子でありながら心理的に親と対等な関係を築く「対等な親子関係」が多くみられるようになることを指摘している（落合・佐藤, 1996）。ここから青年期は親子関係の転換期と位置付けることができるが、特に高校生の時期に変化がみられる。また、田中（2012）は親から大人として認められることは自立意識が促進することを指摘していることから、本研究では高校生の時期の親子関係に着目することとした。

親子関係とひとくちにいても両親の性別（父親・母親）と子どもの性別（息子・娘）の組み合わせから4種類に区別される。社会学の立場では、Persons & Bales（1955 / 1981）は家族の機能に注目したうえで、子どもの社会化における父親と母親の役割の違いを理論化している。具体的には、父親は社会化の後期課程で目標達成や課題遂行を助け、外部の集団と接続する道具的役割を、母親は社会化の

前期課程で感情の調節を助け、内部の集団を維持する表出的役割を担うことが指摘されている（Persons & Bales, 1955 / 1981; 飛田, 1991）。大学生は社会化の後期にあたることから、父親が重要な役割を担うことが指摘されているように（大高・唐沢, 2015）、大学生の適応を検討する際に父親と母親から受ける影響は異なることが予想される。そのため本研究では、父親と母親の影響の差に着目する。

一方で、青年の性別について、青年期において女性は男性に比べて依存を許容される傾向にある（Mattanah et al., 2004）。本邦の親子関係に関する先行研究では、男性は親と距離を置くような形で独立するのに対して、女性は親に対して依存的であることが指摘されている（水本, 2018）。青年期の女性は成人期の女性よりも母親に対して依存的であることが報告されているが（藤原・伊藤, 2007）、母親に対する信頼感の高さと依存の低さが心理健康を規定することが明らかにされていることから（藤原・伊藤, 2010）、自立の重要性が伺える。また、母親と娘は情緒的な結びつきが強く（柏木, 2003）、その強さは他の親子関係の組み合わせと比べて顕著である（Chodorow, 1978 / 1981）。そのような青年期の女性は母親から受ける影響が大きいことが指摘されているため（藤原・伊藤, 2010; 水本・山根, 2011）、青年の性別についても着目することとした。

近年では大学進学率（大学・短大）は年々増加しており、2018年には57.3%と過去最高を記録した（文科省, 2018）。一方で大学中途退学率も増加傾向にあり、2014年度には2.65%を記録している（文科省, 2014）。中途退学の理由に学業不振や学校生活不適応が挙げられる（文科省, 2014）。大学では高校までのような学級単位での活動や担任がなくなり、自らが主体的に動く姿勢が求められる。このような環境では、自分の行動に責任を持たなければならず、大学に適応するためには心理的自立の獲得が必要であると考えられる。先行研究においても適応に対する自立の重要性が指摘されている（Mattanah et al., 2004）。近年は大学の大衆化に伴い、勉学だけでなくサークルやアルバイトといったさまざまな活動の拠点となっており、1日の大半を大学で過ごすこととなる大学生にとって、大学という環境に適応することは重要なことであると考えられる。

大久保・青柳（2003）は、多様な価値観を持つ大学生に対して大学適応感を測定するためには、対人関係や学業のように研究者側が設定した要因ではなく、学生自身の主観的な意味づけを考慮して評価す

る「適応感」を捉えることの重要性を主張している。大学適応感を高める要因に対人関係が挙げられるが、本邦の研究では主に友人関係に着目されてきた（大久保, 2005）。しかし、欧米では、両親の受容的態度が青年の主観的幸福感を高めることや（Rodriguez, Myers, Morris & Cardoza, 2003）、親子の愛着が学業成績を高めるように（Chen, 2017）親子関係が青年の適応を規定することが示されている。青年期においても親子の関係は継続するものであり（小高, 1998）、それは対人関係の基盤となる関係である。また、自立の規定要因のひとつであることから、本研究では落合・佐藤（1996）の指摘に従い、高校生の時期の親子関係に着目することとした。

目 的

本研究は、親子関係の性別組み合わせを考慮したうえで、高校生の時期の親子関係が大学適応感に影響するという仮定に基づき検討を行うこととした。具体的に、先述の通り、水本・山根（2011）は適応的な自立のためには親との信頼関係を築き、それを基盤として心理的に分離することが重要であると述べていることから、高校生の時期の親との信頼関係は心理的分離を高めると仮定した。また、高校生の時期の親との信頼関係および心理的分離は大学適応感を高めると仮定した。

方 法

調査協力者

本研究は、関西の私立大学の大学生と大学院生500名を対象に2017年5月中旬から7月末にかけて調査を行った。346名から質問紙を回収し、年齢が30歳以上の回答者およびデータに不備があるものを除外した。最終的に301名（男性：151名、女性：150名）が有効回答者となった（有効回答率：60.2%）。平均年齢は20.07歳（ $SD = 1.51$ ）であった。

なお、本研究は追手門学院大学研究倫理委員会にて承認を得ている（受付番号2018-11）。

測定項目

(1) 高校生の時期の母子関係：水本・山根（2011）により作成された、母親からの精神的自立尺度を用いた。本尺度は精神的自立について親との関係において信頼関係が築かれていることを示す「親との信頼関係」と親との一体感から分離して自己

を築いていることを示す「親からの心理的分離」の2因子から測定している。第1因子は“父親は私のことを信頼してくれていると思った”“父親は私の考え方を尊重してくれていると感じた”などの6項目、第2因子は“父親の考えや期待にとらわれず、自分の信じたとおりに行動した”“私の人生は父親の人生とは別の独自のものであった”などの5項目が含まれていた。

計11項目について「全く当てはまらない（1点）」－「よくあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。なお、本尺度は母娘関係を測定するために開発されたものであるが、後に水本（2018）が α 係数による信頼性と探索的因子分析による因子的妥当性の確認を行ったうえでその他の親子関係の組み合わせにも適用可能であることを報告している。

(2) 高校生の時期の父子関係：上記の、母親からの精神的自立尺度を改変して用いた。なお、項目の文章について「母親」という表現をそれぞれ「父親」と修正した。

(3) 大学適応感：大久保・青柳（2003）により作成された、大学生用適応感尺度を用いた。本尺度は大学生の適応感について、“周囲に溶け込めている”“周りの人と楽しい時間を共有している”などの項目を含む、気楽な居心地の良さを表す「居心地の良さの感覚」9項目、“他人から頼られていると感じる”“必要とされていると感じる”などの項目を含む、他者からの信頼感や受容感を表す「被信頼・受容感」6項目、“熱中できるものがある”“好きなことができる”などの項目を含む、課題や目的があることから生じる満足感を表す「課題・目的の存在」7項目、“嫌われていると感じる（逆転項目）”“無視されていると感じる（逆転項目）”などの項目を含み、他者からの拒絶感や疎外感を表す「拒絶感の無さ」6項目の4因子から測定している。しかし、それら4つの下位尺度の因子間相関は比較的高いことが報告されていることから（ $r = .385 - .721$ ）、本研究では大学適応感を1つの概念として捉えることとした。合計28項目について「全く当てはまらない（1点）」－「よくあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。なお、大学における適応感について尋ねたため、それぞれの項目の文頭に「大学において」と付け加えた。

結 果

各変数の性差と相関関係

はじめに仮説モデルで使用する変数について各下位尺度の平均値を用いて下位尺度得点を算出した。そのうえで各変数の性差について検討を行ったところ (Table1), 高校生の時期の父親からの心理的分離のみ性差が認められ, 女性のほうが男性よりも得点

が高いことが示された ($t(299)=2.20, p<.05$)。

次に相関係数を男女別に求めたところ (Table1), 男女ともに高校生の時期の両親との信頼関係と大学適応感の間に正相関が認められた ($r=.20-.34$)。さらに, 女性は高校生の時期の母親からの心理的分離と大学適応感 ($r=.19, p<.05$) の間に正相関が, 高校生の時期の父親との信頼関係と父親からの心理的分離の間に負相関が認められた ($r=-.23, p<.01$)。

Table1 各変数の記述統計量と性差および相関行列

	平均 (SD)		t	α	相関係数 (r)				
	男性	女性			父親信頼	父親分離	母親信頼	母親分離	大学適応感
父親信頼	3.29 (.89)	3.16 (1.14)	1.11	.88	—	-.15 +	.54 ***	-.02	.31 ***
父親分離	3.59 (.82)	3.79 (.75)	2.20 **	.72	-.23 **	—	-.03	.65 ***	.04
母親信頼	3.60 (.88)	3.70 (.94)	.94	.87	.27 **	-.08	—	-.02	.20 *
母親分離	3.52 (.77)	3.59 (.75)	.85	.67	.03	.52 ***	-.09	—	.07
大学適応感	3.37 (.62)	3.43 (.57)	.93	.92	.34 ***	.06	.24 ***	.19 *	—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$ 右上:男性, 左下:女性

仮説モデルの検討

高校生の時期の親子関係が大学適応感に影響を及ぼすという仮説モデルを検討するためAmos Ver24を用いて, 男女別に構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を行った。具体的には, 相関係数を基に高校生の時期の両親との信頼関係 (第1層) から高校生の時期の両親からの心理的分離 (第2層) と大学適応感 (第3層), 高校生の時期の両親からの心理的分離 (第2層) から大学適応感 (第3層) に対してパスを設定し, 適合度指標を参考に分析を行った。その結果, 最終的には以下に示したモデルが得られた (Figure1)。

適合度指標について, 男女の各パスに等値制約ありとしたモデルは $\chi^2(10) = 3.62, p = .963, GFI = .995, AGFI = .986, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 43.618$, 等値制約なしとしたモデルは $\chi^2(4) = 1.11, p = .892, GFI = .999, AGFI = .989, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 53.114$ であった。本研究では性差を検討することが目的であったことから, 等値制約なしとしたモデルのAICのほうが低いものの, 適合度は十分に高く, 採択可能である数値を示していることから等値制約なしとしたモデルを採用した。ここから, 高校生の時期の親との信頼関係が心理的分離を高め, その結果大学適応感が高まるという仮説モデルの妥

当性が示された。

分析の結果, 男女共通して高校生の時期に父親との信頼関係が高いと大学適応感が高まることが明らかとなった ($\beta = .28, p<.01$; $\beta = .29, p<.001$)。それに加え, 女性は高校生の時期に母親との信頼関係 ($\beta = .18, p<.05$) および心理的分離 ($\beta = .19, p<.01$) が高いと大学適応感が高まることが明らかとなった。男女間での標準化回帰係数の差の検定を行ったところ, それぞれ有意差が認められた ($z = .85, p<.05$; $z = 1.12, p<.05$)。一方で, 男女ともに高校生の時期に父親との信頼関係が高いと父親からの心理的分離を阻害することが明らかとなった ($\beta = -.14, p<.05$; $\beta = -.24, p<.001$)。

考 察

本研究では, 高校生の時期の親との信頼関係が心理的分離を高め, その結果大学適応感が高まるという仮説モデルの検討を行った。高校生の時期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響について男女共通して認められた経路は, 高校生の時期に父親との信頼関係が高いと大学適応感が高まることであった。この理由として父親と信頼関係を築くことで, Persons & Bales (1955 / 1981) の主張する道具的役割とし

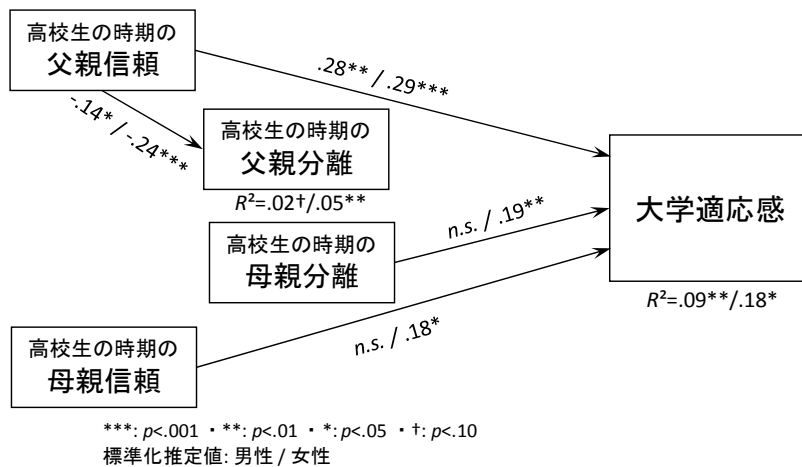


Figure1 高校生の時期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響（男女別）

て父親が機能し、外部の集団である大学での適応感を高める可能性が示唆された。また、大高・唐沢（2015）の青年期後期における父親の道具的な役割の重要性に関する指摘とも一致する結果であった。

それに加え、女性は高校生の時期に母親との信頼関係および心理的分離が高いと大学適応感が高まり、それらの影響は男性よりも有意に大きいことが明らかとなった。この結果は、娘は母親から受ける影響が大きいという指摘（藤原・伊藤, 2010; 水本・山根, 2011）を考慮すると、女性のみに影響が認められたことは妥当な結果であると考えられる。また、女性にのみ心理的分離から適応感への影響が認められたことについては、女性は自立に困難をきたすこと（Mattanah et al., 2004）や青年期の女性は母親に対して依存적であり自立に関する課題を抱えていること（藤原・伊藤, 2007）が反映された結果であると考えられる。藤原・伊藤（2010）においても母親に対する依存が低いことが心理的健康と結びつくことが示されており、娘にとって最も身近な同性である母親から心理的に分離することが適応感を獲得するうえで重要であると考えられる。

一方で、男性は有意傾向にとどまったものの、男女ともに父親との信頼関係の高さが心理的分離を阻害することが明らかとなった。父親との信頼関係が高まると父子関係が密接なものになり、心理的な分離に困難をきたすように母子関係とは異なる影響が及ぼされることが考えられる。この点については今後より慎重な検討が必要である。

最後に本研究における限界点と今後の課題について記述する。限界点の1つ目は、回顧的な回答を

必要とする高校生の時期の親子関係を現在の大学適応感と同時に測定したことである。本研究では時間的な要因を考慮したうえで、高校生の時期の親子関係が現在の大学適応感に影響を及ぼすと仮定したが、現在の環境が過去の親子関係に影響を及ぼすように回顧的回答にはバイアスがかかる可能性が否めない。そのため、今後は縦断的な研究デザインを用いることが望ましい。次に、本研究では青年の適応を捉える指標を大学適応感としたが、それは大学生に限定される指標である。青年の適応をより広くとらえるには生涯にわたり重要視されている精神的健康や主観的幸福感等の指標を扱う必要があるだろう。

引用文献

- Arnett, J. J. (2000). Emerging Adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, 469-480.
- Chen, B. (2017). Parent-adolescent attachment and academic adjustment: The mediating role of self-worth. *Journal of Child and Family Studies*, 26, 2070-2076.
- Chodrow, N. (1978). The reproduction of mothering. Berkeley, CA: University of California Press. (チヨドロウN. (編) 大塚光子・大内菅子 (訳) (1981). 母親業の再生産 新曜社)
- 藤原 あやの・伊藤 裕子 (2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学研究, 19, 62-82.
- 藤原 あやの・伊藤 裕子 (2010). 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達——母娘関

- 係が心理的健康に及ぼす影響 カウンセリング研究, 43, 33-42.
- 平石 賢二 (2010). 青年期の親子関係. 大野 久 (編著). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房.
- 平石 賢二 (2015). 青年期の親子関係の特徴. 白井利明 (編). よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房.
- Hoffman, J. F. (1984). psychological separation of late adolescents from their parents *Journal of Counseling Psychology*, 31, 170-178.
- 柏木 恵子 (2003). 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会.
- 小高 恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析の研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- 飛田 操 (1991). 道具的並びに情緒的対人機能の提供と獲得が関係への満足度に及ぼす効果—女子青年を対象として 教育心理学研究, 39, 67-74.
- Mattanah, J. F., Hancock, G. R., & Brand, B. L. (2004). Parental attachment, separation-individuation, and college student adjustment: A structural equation analysis of mediation effects. *Journal of Counseling Psychology*, 31, 213-225.
- 宮本 みち子 (2004). ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容 勁草書房.
- 水本 深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係—精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差 教育心理学研究, 66, 111-126.
- 水本 深喜・山根 律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, 59, 462-473.
- 文部科学省 (2014). 学生の中途退学や休学等の状況について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (11月12日)
- 文部科学省 (2018). 平成30年度学校基本調査(確定値)の公表について Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_1.pdf (11月12日)
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 大石 美穂・松永 しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成 日本家政学会誌, 59, 461-469.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の観点からパーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 大高 瑞都・唐沢 かおり (2015). 成人形成期の子どもの父親に対する態度を規定する要因—父親からの行動に関する子どもの認知に着目して 社会心理学研究, 21, 89-100.
- Parsons, T., & Bales, R.F. (1995). Family socialization and interaction process. Glencoe Free Press. (橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明 (訳) (1981). 家族 黎明書房)
- Rodriguez, N., Mira, C. B., Myers, H. F., Morris, J. K., & Cardoza, D. (2003). Family or friends: Who plays a greater supportive role for Latino college student? *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 9, 236-250.
- 高坂 康雅 (2016). 大学生活の重点からみた現代青年のモラトリアムの様相—「リスク回避型モラトリアム」の概念提起 発達心理学研究, 27, 221-231.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)—青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響 北海道教育大学紀要, 55, 77, 85.
- 高富 莉那・桂田 恵美子 (2011). 大学生の心理的自立と親の養育態度との関連 臨床教育心理学研究, 37, 27-32.
- 田中 輝美 (2012). 大学生の認知する親の自立促進態度と心理的自立の関連について カウンセリング研究, 45, 220-228.
- 山田 昌弘 (1999). パラサイトシングルの時代 ちくま新書.
- 山田 裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.

謝 辞

本研究の調査と論文作成にあたり、最後まで丁寧かつ熱心にご指導くださいました馬場天信教授に深く感謝を申し上げます。また、調査にあたりご協力いただきました大学生の皆様へ感謝を申し上げます。